

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様をさがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合ひましょう。
- ③ディボーションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族でいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと？
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか？（または誉めたいですか？）1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか？
- ④互いの必要のために祈りましょう。

ディーヴォ ガイド



2025.9.1-7

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合ひましょう。（2～3つ）
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディボーションの分かち合い（なるべく短く）
- ④預言の祈り（主の御心を宣言して祈り）をします。

1:1 キリスト・イエスのしもべ、神の福音のために選び出され、使徒として召されたパウロから。

1:2 ——この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので、

1:3 御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、

1:4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。

1:5 この方によって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。御名のために、すべての異邦人の中に信仰の従順をもたらすためです。

1:6 その異邦人たちの中であって、あなたがたも召されてイエス・キリストのものとなりました——

1:7 ローマにいるすべての、神に愛され、召された聖徒たちへ。私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

パウロの自己紹介です。彼は自分のことを「キリスト・イエスのしもべ」と言っています。この世の立場や実績よりも、イエス様との関係が何よりも重要と考えているのです。それこそがクリスチャンの自己像です。

また単なるしもべではなく、このイエス様がいかにか素晴らしい救い主であるかが、そこに宣言されています。私たちも自分自身を、神様の救いのみわざとの関係で理解しましょう。そうするなら、揺るぎなくまた肯定的な自己像が確立できるのです。

そのようにして自分を見て、また人生を見て、生きましょう。そうするなら人々からもそのように見られるようになります。それが証しであり、宣教の第一歩です。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



2日 火曜

ローマ



1:8 まず初めに、私はあなたがたすべてについて、イエス・キリストを通して私の神に感謝します。全世界であなたがたの信仰が語り伝えられているからです。

1:9 私が御子の福音を伝えつつ心から仕えている神が証ししてくださるのですが、私は絶えずあなたがたのことを思い、

1:10 祈るときにはいつも、神のみこころによって、今度こそついに道が開かれ、何とかしてあなたがたのところに行けるようにと願っています。

1:11 私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでも分け与えて、あなたがたを強くしたいからです。

1:12 というより、あなたがたの間であって、あなたがたと私の互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。

1:13 兄弟たち、知らずにいてほしくはありません。私はほかの異邦人たちの間で得たように、あなたがたの間でもいくらかの実を得ようと、何度もあなたがたのところに行く計画を立てましたが、今に至るまで妨げられてきました。

1:14 私は、ギリシア人にも未開の人にも、知識のある人にも知識のない人にも、負い目のある者です。

1:15 ですから私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。

1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。

1:17 福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は

信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

ているのです。

パウロはローマのクリスチャン達を愛していましたが、それは人情よりも、主の使命によるものです。またはその愛情ゆえに主からの使命を受け取り、それを第一にしました。

その使命とは「負い目を負っている」ということで、すなわち福音宣教の責任を負っているということです。それは神様からのもので、負担というよりも光栄であり、喜びの伴ったものです。

私たちも愛する人や大切な人のためには、何よりも救いのために負債があるのだということを、もっと自覚していきましょう。

また「福音を恥としない」で、むしろ誇りを持ちましょう。クリスチャンである自分を誇るものではありません。それは逆の気持ちにさえなるときがあるでしょうから。そうではなく、福音そのものに誇りを持つのです。またクリスチャンであることで萎縮する必要はありません。

イエス様は「わたしとわたしのことを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」と言われました。周囲に配慮することは必要ですが、その上で、時には大きな顔をしてクリスチャンであることを知らしめましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



3日 水曜

ローマ



1:18 というのは、不義によって真理を阻んでいる人々のあらゆる不敬虔と不義に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。

1:19 神について知りうることは、彼らの間で明らかです。神が彼らに明らかにされたのです。

1:20 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。

1:21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。

1:22 彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、

1:23 朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。

1:24 そこで神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡されました。そのため、彼らは互いに自分たちのからだを辱めています。

1:25 彼らは神の真理を偽りと取り替え、造り主の代わりに、造られた物を拝み、これに仕えました。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。

1:26 こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、彼らのうちの女たちは自然な関係を自然に反するものに替え、

1:27 同じように男たちも、女との自然な関係を捨てて、男同士で情欲に燃えました。男が男と恥ずべきことを行い、その誤りに対する

当然の報いをその身に受けています。

1:28 また、彼らは神を知ることに価値を認めなかったので、神は彼らを無価値な思いに引き渡されました。それで彼らは、してはならないことを行っているのです。

1:29 彼らは、あらゆる不義、悪、貪欲、悪意に満ち、ねたみ、殺意、争い、欺き、悪巧みにまみれています。また彼らは陰口を言い、

1:30 人を中傷し、神を憎み、人を侮り、高ぶり、大言壮語し、悪事を企み、親に逆らい、

1:31 浅はかで、不誠実で、情け知らずで、無慈悲です。

1:32 彼らは、そのような行いをする者たちが死に値するという神の定めを知りながら、自らそれを行っているだけでなく、それを行う者たちに同意もしているのです。

神を認めない人には、やはり責任があります。神を知らないからしょうがないというのではなく、被造物によって、神を知ることができるはずだというのです。それで神を認めないなら、その不信仰は本人の責任であるということです。

神を信じない人、あまたは神の存在を信じつつも神に従わない人は、結局自分の欲望に従ってしまいます。偶像礼拝とは、実は自分の欲望を礼拝することになるのです。その結果、サタンがその欲望を利用して、思いのままに人を操るのです。人は自分のために信仰しているようで、実はサタンに動かされてしまいます。

愛する人々が、サタンのゆえに滅びにいかないように、私たちは愛をもって、伝道しましょう。”信仰は本人の自由だから...”といって、愛する人に伝道しないのは、単なる言い訳にしか過ぎません。自由だからこそ、その人が自ら信じられるように、愛をもって心を砕いて伝道するのです。

救いのために祈りましょう。今、何かできることはないでしょうか。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



4日 木曜

ローマ



2:1 ですから、すべて他人をさばく者よ、あなたに弁解の余地はありません。あなたは他人をさばくことで、自分自身にさばきを下しています。さばくあなたが同じことを行っているからです。

2:2 そのようなことを行う者たちの上に、真理に基づいて神のさばきが下ることを、私たちは知っています。

2:3 そのようなことを行う者たちをさばきながら、同じことを行っている者よ、あなたは神のさばきを免れるとも思っているのですか。

2:4 それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。

2:5 あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。

2:6 神は、一人ひとり、その人の行いに応じて報いられます。

2:7 忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと朽ちないものを求める者には、永遠のいのちを与え、

2:8 利己的な思いから真理に従わず、不義に従う者には、怒りと憤りを下されます。

2:9 悪を行うすべての者の上には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、苦難と苦悩が下り、

2:10 善を行うすべての者には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、栄光と誉れと平和が与えられます。

2:11 神にはえこひいきがないからです。

2:12 律法なしに罪を犯した者はみな、律法な

しに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はみな、律法によってさばかれます。

2:13 なぜなら、律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行う者が義と認められるからです。

2:14 律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じることを行う場合は、律法を持たなくても、彼ら自身が自分に対する律法なのです。

2:15 彼らは、律法の命じる行いが自分の心に記されていることを示しています。彼らの良心も証ししていて、彼らの心の思いは互いに責め合ったり、また弁明し合ったりさえするのです。

2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。

前節ではパウロは、神を神としてあがめない者の罪について語っています。神をあがめない者は、結局自分自身の欲望によって生きているので、罪に陥ってしまうということです。そこには自己中心という問題が根深く横たわっています。

そこで次は「他人をさばく者」の自己中心について、パウロは問題にします。他人をさばく人は自己中心です。また自分が見えていない人です。すなわち、自分は正しい思い込んでいるので、他の人をさばくのです。

しかし、実は自分自身が罪を犯しているのです。自分で自分をさばいているのと同じなのです。どんなに他人をさばいて、自分は正義感があると思っても、神の前には罪人である以上さばかない人よりももっと悪いことになってしまいます。

私たちも、神様に従っていないとしたら、無意識でも意識的にも、神様に逆らっているのです。

から罪を犯していることになります。他人をさばくことはやめましょう。私たちはもう十字架で罪が赦されているのですから、そのことの感謝によってまた新しく生まれたその価値観によって歩みましょう。その感謝と価値観は聖霊様によって与えられます。

結局すべての人が神様の前には罪ある者なので、そのことをパウロは明かにしていきます。当時ユダヤ人は、自分たちは特別なので罪はないと思っていました。しかしパウロは「神にはえこひいきがない」と語ります。同じようにクリスチャンであっても、つまり神の子としていただいた者でも、罪は罪です。クリスチャンだから大目に見てもらえるというでもないのです。

しかし、クリスチャンは新しく神から生まれたものなので、神の価値観に従いたいという思いが与えられています。神様に逆らい続けると苦しくなり、やはり神に従いたいという思いが出てくるのが自然なのです。

「生まれつきのままの律法」と言われる、良心もまた主のみこころです。「律法を行う者」でありましょう。かつては「神のさばき」にあうべき者でしたが、今は十字架によって赦されて新しく生まれたものですから、その確信を持しましょう。そして主に従うことが最も嬉しいことなのだという確信を持ちましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

5日 金曜

ローマ



2:17 あなたが自らユダヤ人と称し、律法を頼みとし、神を誇り、
2:18 みこころを知り、律法から教えられて、大切なことをわきまえているなら、
2:19 20 また、律法のうちに具体的に示された知識と真理を持っているので、目の見えない人の案内人、闇の中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だ、と自負しているなら、
2:20 【前節と合節】
2:21 どうして、他人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。
2:22 姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌み嫌いながら、神殿の物をかすめ取るのですか。
2:23 律法を誇りとするあなたは、律法に違反することで、神を侮っているのです。
2:24 「あなたがたのゆえに、神の御名は異邦人の間で汚されている」と書いてあるとおりです。
2:25 もしあなたが律法を行うなら、割礼には価値があります。しかし、もしあなたが律法の違反者であるなら、あなたの割礼は無割礼になったのです。
2:26 ですから、もし割礼を受けていない人が律法の規定を守るなら、その人の無割礼は割礼と見なされるのではないのでしょうか。
2:27 からだは無割礼でも律法を守る人が、律法の文字と割礼がありながらも律法に違反するあなたを、さばくことになります。
2:28 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、外見上のからだの割礼が割礼ではない

からです。

2:29 かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による心の割礼こそ割礼だからです。その人への称賛は人からではなく、神から来ます。

ユダヤ人は神の民だから、他の民族のようにには汚れていないと信じ込まれていました。しかしパウロはそれであっても、罪は罪なのだと指摘します。

すなわち彼らは信仰があるからと安心して、罪を犯しても何も感じなくなっていたのです。「盗み」「姦淫」「違反」などです。信仰は外見や立場ではありません。信仰年数でもありません。

私たちが救われているということに安心して、神様に従わないなら、ここに警告されているユダヤ人と同じになってしまいます。

心の内に、そして個人的な行いに、自分自身の信仰が表れているか、よく吟味しましょう。必要があれば、謙遜に足りなさや間違いを認めて、聖霊によって自分を変えていただきましょ

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



6日 土曜

ローマ



3:1 それでは、ユダヤ人のすぐれている点は何ですか。割礼に何の益があるのですか。
3:2 あらゆる点から見て、それは大いにあります。第一に、彼らは神のこぼを委ねられました。

3:3 では、どうですか。彼らのうちに不真実な者がいたなら、その不真実は神の真実を無にするのでしょうか。

3:4 決してそんなことはありません。たとえすべての人が偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです。「それゆえ、あなたが告げるとき、あなたは正しくあられ、さばくとき、勝利を得られます」と書いてあるとおりです。

3:5 では、もし私たちの不義が神の義を明らかにするのなら、私たちはどのように言うべきでしょうか。私は人間的な言い方をしますが、御怒りを下す神は不義なのでしょうか。

3:6 決してそんなことはありません。もしそうなら、神はどのようにして世界をさばかれるのですか。

3:7 では、もし私の偽りによって神の真理がますます明らかにされて、神の栄光となるのなら、どうして私はなおも罪人としてさばかれるのですか。

3:8 「善をもたらすために悪を行おう」ということになりませんか。私たちがそう言っていると、ある者たちから中傷されています。そのように中傷する者たちが、さばきを受けるのは当然です。

ユダヤ人に罪があるのなら、彼らに律法を与えたことに意味があったのか…という問題にパウロは答えています。それは神の真実が表れたのだというの

です。

しかしそこで新たな問題が生まれます。すなわち、意味があったのならユダヤ人の罪も神の役にたったのではないか…という反論です。

それに対してパウロは、「決してそんなことはありません。もしそうなら、神はどのように世をさばかれるのですか。」と答えを与えます。

もしも罪を犯すことで神の義が明かにされるのであれば、罪も良いことになってしまいます。それは詭弁です。この詭弁を用いてパウロたちを中傷する人々がいましたが、「そのように中傷する者たちが、さばきを受けるのは当然です。」と明言されています。

自分の罪を認めたくない人は、このようにあらゆる弁解や詭弁を産み出しますが、それらは神の前にはすべて成り立ちません。素直に自分の罪を認める人が救いに近い人であり、私たちはそのようにして救いの憐れみをいただいたのですから、これからも罪を認める謙遜さを持って行きましよう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



3:9 では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。

3:10 次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。一人もない。」

3:11 悟る者はいない。神を求める者はいない。

3:12 すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない。」

3:13 「彼らの喉は開いた墓。彼らはその舌で欺く。」「彼らの唇の下にはまむしの毒がある。」

3:14 「彼らの口は、呪いと苦みに満ちている。」

3:15 「彼らの足は血を流すのに速く、

3:16 彼らの道には破壊と悲慘がある。

3:17 彼らは平和の道を知らない。」

3:18 「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」

3:19 私たちは知っています。律法が言うことはみな、律法の下にある者たちに対して語られているのです。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。

3:20 なぜなら、人はだれも、律法を行うことによっては神の前に義と認められないからです。律法を通して生じるのは罪の意識です。

ここにきてパウロはユダヤ人に律法が与えられたことの意味を明確にします。それは旧約と十字架の救いとの関係を明かにすることでもあります。

律法とは「罪の意識」が生じるためのものです。

つまり律法に従いきれなかったユダヤ人にとっての罪の意識であり、また現代人にとっても同じです。現代人そのユダヤ人の歴史を知って自らを考えてみると、同じように自分の罪が明らかになるでしょう。

私たちもモーセの律法を旧約聖書で読むとき、自分の罪が明らかになります。または、「心に記された律法」とパウロが言うところの良心に照らされるとき、自分の罪や心の汚さを感じずにはいられないでしょう。

主のきよさや自分自身の良心と、真剣に誠実に向き合いましょう。そこから主は何を語られるのでしょうか。主の十字架の赦しを確信とともに感謝しましょう。そして主の御心に対して、希望と安心を持って従いましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

